

タイ中等教育機関におけるタイ人日本語教師の良い日本語教師観 ——PAC 分析と半構造化面接より——

古別府 ひづる

1. はじめに

独立行政法人国際交流基金（2003）実施の「海外の日本語教育機関調査」によると、タイにおける学習者数は 54884 人（世界第 7 位）で、機関数、教師数、学習者数、全てにおいて増加している。タイでは、これまで高等教育機関を中心に発展してきたが、1981 年には、日本語が後期中等教育課程に正式科目として採用され、中等教育機関（高校）にも広がっている。これは、他の日本語学習者数上位国に初等中等教育が普及していることと傾向を一にしている。この傾向に着目し、縫部他（2006）では、海外の中等教育段階における優れた日本語教師についての国際調査を進めているが、タイもその対象国になっている。

本研究では、量的分析とは対照的なタイ中等教育機関（高校）におけるタイ人日本語教師二人に焦点を当て、PAC 分析（個人別態度構造）を用いて、タイ人日本語教師の考える良い日本語教師について考察する。

先行研究として、才田（2003）は、大学の学部・大学院における日本語教育実習生の授業への態度について PAC 分析を用いて現職日本語教師との比較を通し、考察している。また、横林（2004）は、大学日本語教員養成課程履修生の良い日本語教師のイメージについて PAC 分析を用い、海外留学や実習経験の多い学生と少ない学生との比較の中で分析している。しかしながら、タイにおけるタイ人現職日本語教師の良き日本語教師観を PAC 分析を通して考察した研究はないと考えられる。

タイの高校で日本語を教えるタイ人日本語教師一人一人は、どんな思いで、日本語を教えているのだろうか。筆者と同じ、日本語教師としてどのような共通の部分があるのだろうか。さらに、タイ人日本語教師の特徴が見出せるのであろうか。

そこで、本研究では、以下のことを目的として調査を行った。

- 1) タイ人日本語教師の個人的良き日本語教師観を知る。
- 2) 日本語教育経験差による態度の違いを比較する。
- 3) タイの日本語教育事情の理解と状況改善の一助とする。

2. 研究方法

2.1 PAC 分析

本研究では PAC 分析という手法を用いた。PAC（Personal Attitude Construct）分析は、個人別の

態度構造を測定するために内藤（2004）によって開発された技法である。この分析法は、①当該テーマに関する自由連想、②連想項目間の類似度評定、③類似度距離行列によるクラスター分析、④被験者によるクラスター構造の解釈やイメージの報告、⑤実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を測定・分析する方法である。

2.2 被調査者

調査は、2007 年 11 月に、タイの国際交流基金バンコク日本文化センターにて、高校に勤務する以下のタイ人日本語教師二人に対して実施された。

タイ人日本語教師 A：女性、年齢は 30 代、母語はタイ語、日本語教師歴 4 年、日本への渡航経験（滞在期間の合計）5 回（1 年 10 ヶ月）

タイ人日本語教師 B：女性、年齢は 50 代、母語はタイ語、日本語教師歴 15 年、日本への渡航経験（滞在期間の合計）3 回（10 ヶ月）

2.3 手続き

PAC 分析を中心に、半構造化面接法（semi-structured interview）の手法を加えて行った。半構造化面接法とは、質問をある程度決め比較的自由に答えてもらう方法である。双方の手続きは全て日本語によって行われた。PAC 分析の共通の質問は以下である。

質問：「あなたにとって良い日本語教師とはどんな教師ですか」

また、半構造化面接法の共通の質問は以下である。

質問：①日本語教師になったきっかけ、②日本語教師になって良かったことと不満なこと、

③勤務先の高校の日本語教育環境、④人生の目標、⑤自分の性格

2.3.1 PAC 分析の手続き

被験者に、「あなたにとって良い日本語教師とはどんな日本語教師ですか」という質問をあたえる。想起順に、カードに 1 枚ごとに 1 項目ずつ書かせる。思い浮かばなくなるまで、何枚でも書いて良いと言う。次に、想起順に並べたカードを重要順に並べ替えてもらう。その後、各連想項目間の類似度を直感的イメージで 7 段階評価（非常に近い 1、かなり近い 2、幾分近い 3、どちらとも言えない 4、幾分遠い 5、かなり遠い 6、非常に遠い 7）で評定させた。それによって作成された類似度距離行列に基づき、ウォード法でクラスター分析をした。

クラスター分析により得られたデンドログラムには、重要順位の番号が打たれている。実験者は連想項目を読み上げ、被験者は対応する連想項目を書き入れながら、被験者が記憶をよみがえらせると共に意識化する段階を設けた。それから、クラスターとして解釈できそうなかたまりを実験者が伝え、それについて被験者が確認し、実験者は被験者と共にクラスター名をつけるという作業を行った。また、実験者は被験者に同じグループに思える理由について質問した。最後に実験者が総合解釈を行った。

3. 結果

クラスター分析の結果は、以下の図1と図2のデンドログラムを参照。

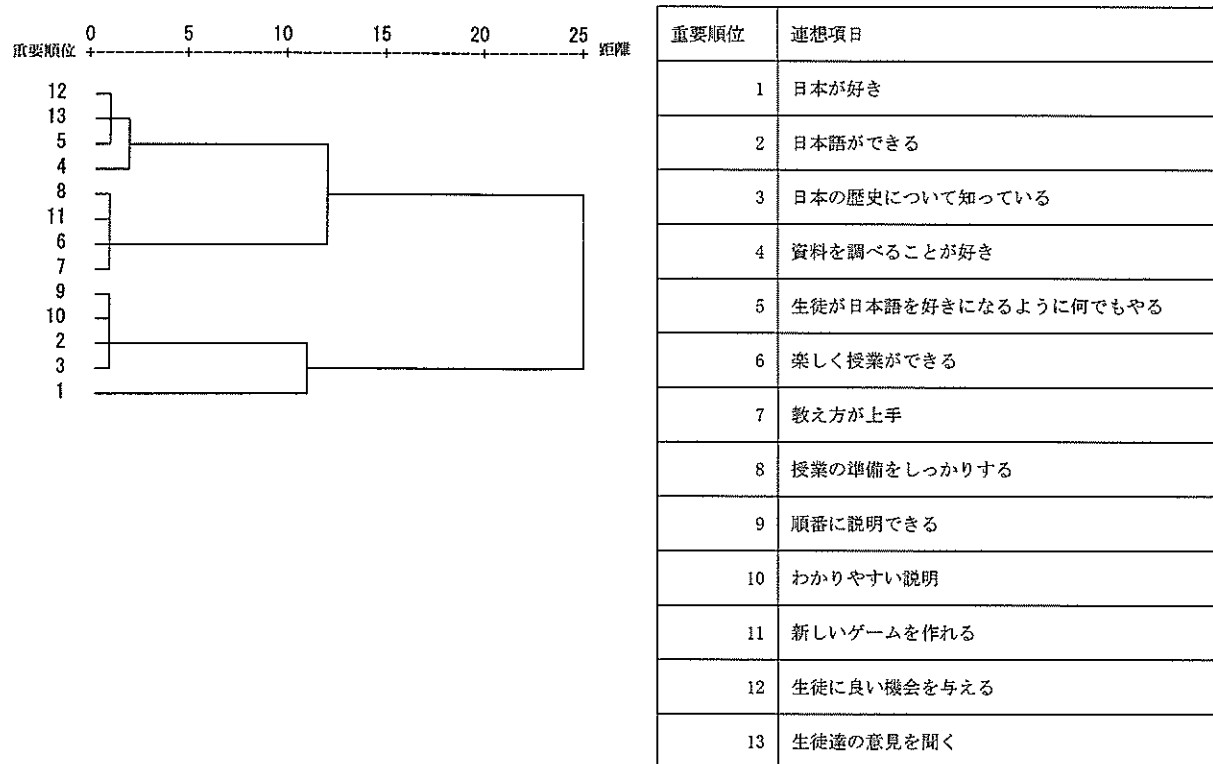


図1 タイ人日本語教師 A のデンドログラム

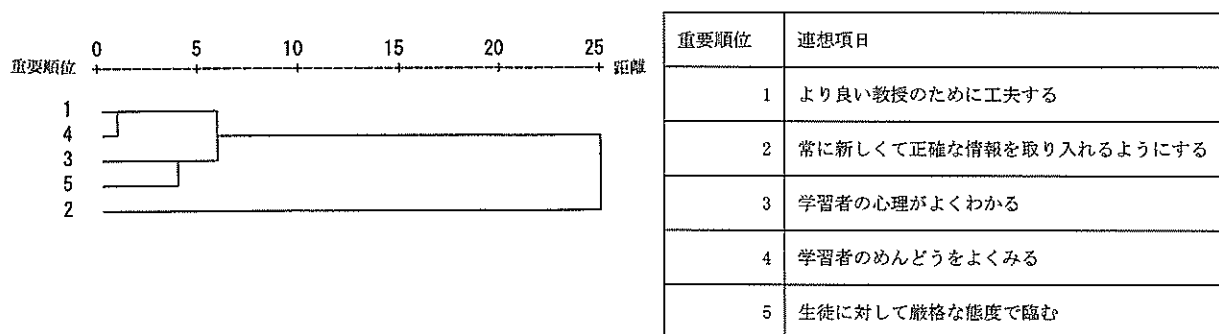


図2 タイ人日本語教師 B のデンドログラム

3.1 タイ人日本語教師 A（教師経験 5 年未満）

全部で 13 項目、4 つのクラスターに分けることができた（図1参照）。

3.1.1 重要項目

重要項目順に挙げると、以下であった。

①日本が好き ②日本語ができる ③日本の歴史について知っている ④資料を調べることが好き ⑤生徒が日本語が好きになるように何でもやる ⑥楽しく授業ができる ⑦教え方が上手 ⑧授業の準備をしっかりとる ⑨順番に説明できる ⑩わかりやすい説明 ⑪新しいゲームが作れる ⑫生徒に良い機会を与える ⑬生徒達の意見を聞く

3.1.2 クラスター

(1) クラスター1：名付け：「教師は生徒のためにある」

タイ人日本語教師 A（教師経験 5 年未満）と名付けたクラスターのタイトルは、「教師は生徒のためにある」であった。その下位区分は以下である。重要順位を（）に示す。

「生徒に良い機会を与える」（12）、「生徒達の意見を聞く」（13）、「生徒達が日本語が好きになるように何でもやる」（5）、「資料を調べることが好きだ」（4）、という 4 つから構成される。

この中で、重要順位が、13 項目中 4 位であった「資料を調べることが好きだ」については、一例としては、インターネットで調べて最新の情報を与えるということであった。

(2) クラスター2：名付け：「授業のためにいろいろな工夫をする」

クラスターのタイトルは、「授業のためにいろいろな工夫をする」であった。その下位区分は以下である。重要順位を（）に示す。

「楽しく授業ができる」（6）、「教え方が上手」（7）、「授業の準備をしっかりとる」（8）、「新しいゲームが作れる」（11）、という 4 つから構成される。

この中で、重要順位が上位 3 分の一以上のものはなかった。

(3) クラスター3：名付け「授業の内容、導入の仕方」

クラスターのタイトルは、「授業の内容、導入の仕方」であった。その下位区分は以下である。重要順位を（）に示す。

「順番に説明できる」（9）、「わかりやすい説明」（10）、「かなり日本語ができる」（2）、「日本の歴史について知っている」（3）、の 4 つから構成される。うち、重要順位の 2 位に、「かなり日本語ができる」、3 位に、「日本の歴史について知っている」があり、日本語・日本事情の知識の優位性が特徴づけられる。

(4) クラスター4：名付け：「日本が好き」

クラスターのタイトルは、「日本が好き」であった。その下位区分としては、1 項目のみで、「日本が好き」（1）であった。重要順位も 1 位でもあり、日本が好きでなければ始まらないということであった。また、日本のどんなところが好きかと尋ねると、落ち着いた感じ、経済的發展、日本に数回行った経験があるが、滞在中に多くの人にお世話になったこと、特に、ホームステイ先の 60 代の夫婦には、自分が病気になったときに看病してもらい、自分の第二の両親であると。

3.1.3 半構造化面接

(1) 日本語教師になったきっかけ

もともと、高校の英語教師であったが、日本に行くという機会に恵まれて、日本語を教えるようになった。JICA の交換プログラムで1ヶ月（福島県でホームステイを体験）、国際交流基金日本語国際センターに日本語研修生として7週間、ロータリークラブの奨学金で北海道に1ヶ月（ホームステイも体験）、文部科学省の奨学金で某国立大学に1年半留学したことがある。最初は高校の日本語クラブで教えていた。

(2) 日本語教師になって良かったことと不満なこと

良かったことは、日本に行くという素晴らしい機会を得られたこと。不満なことは、生徒の中には経済的な問題で学校が終われば家事を手伝わなければならない者が多いということ。本を紹介しても買えない生徒が多い。日本語教材が不足しており、日本語教師からしか知識が得られないこと。

(3) 勤務先の高校の日本語教育環境

教師 A の高校は、オリンピック級の選手を輩出するスポーツの盛んな高校である。現在、英語と日本語の語学主任。校長の理解があり、何回も日本留学の機会が与えられた。主任なので、日本語だけではなく英語教育のことも考えなければならない。また、日本語教師は自分だけなので、非常に忙しい。(2)でも言及したが、日本語教材が不足している。日本語学習者は増加しているにもかかわらず、日本語教師の待遇は良くない。例えば、英語や仏語のポジションはあるが、日本語教師のポジションはない。

(4) 人生の目標

日本の大学院に行き、修士号を取り、タイに戻って大学の教員になりたい。できれば、博士号を取りたい。そのためには、体力と精神力とお金と時間が必要である。まずは、奨学金がほしい。お金持ちになりたい。それによって、教師は生徒に尽くす余裕ができる。タイでは、給料だけでは生活できずアルバイトをしている教師が多いからである。

(5) 自分の性格

好きなところは、元気なところ、楽天的、強い。嫌いなところは、几帳面でない、研究肌というよりも教育肌であるところ。

3.2 タイ人日本語教師 B （教師経験 10 年以上）

全部で5項目、3つのクラスターに分けることができた（図2参照）。

3.2.1 重要項目

重要項目順に挙げると、以下であった。

①より良い教授のために工夫する ②常に新しくて正確な情報を取り入れるようにする ③学習者の心理がよくわかる ④学習者のめんどろをよくみる。⑤生徒に対して厳格な態度で臨む。

3.2.2 クラスター

(1) クラスター1：名付け：「教え方—教えることが生徒を知ることである—」

タイ人日本語教師 B（教師経験 10 年以上）と名付けたクラスター1 のタイトルは、「教えることが生徒を知ることである」であった。下位区分は以下である。重要順位を（）に示す。

「より良い教授法のために工夫する」(1)、「学習者のめんどろをよくみる」(4) という2 つから構成される。「より良い教授法のために工夫する」が重要順位の1 位の項目であった。クラスター名との関連性について被験者に尋ねると、「教えながら学習者の問題が見えてくる」と、教授テクニックと心理面とは繋がっているということであった。クラスター名「教えることが生徒を知ることである」という名付けには、教授テクニックと人間性を区分する傾向に示唆を与えている。これは、量的分析のみの調査ではわかりにくいことである。

(2) クラスター2：名付け：「態度—学習者の心理を知ること教室運営—」

クラスター2 のタイトルは、「態度—学習者の心理を知ること教室運営—」であった。その下位区分は以下である。

「学習者の心理がよくわかる」(3)、「学習者に対して厳格な態度で臨む」(5) の2 項目であった。被験者のコメントとしては、教師は授業について行けない生徒の心理が分かっているなければ解決の方法が見いだせない。教師が親切すぎれば生徒は甘く見る。それが生徒の心理である。クラス運営をする上でも、時々、厳しさが必要であるということであった。

最も重要なことは、生徒と教師との信頼関係である。生徒の意見を取り入れるとともに、アドバイスできる。尊敬する気持ち、人への接し方、学生の個性を重んじる。生徒は経験豊富な人からのアドバイスが必要。問題があったら話す機会を作ろうとすることが大事だ。冷静に対応する。モラル（道徳）も教えなければならない。コミュニケーション・アプローチ等の学習者中心のゲームは少しだけ行う。

(3) クラスター3：名付け：「教師の知識欲」

クラスター3 のタイトルは、「教師の知識欲」である。下位には1 項目、「常に新しく正確な情報や知識を取り入れようにする」(2) であった。しかし、IT 教育に関しては、それが一番良い方法とは限らない。失敗が続くならやめた方が良い。IT 教育は、人間である教師だからできることであると。

3.2.3 半構造化面接

(1) 日本語教師になったきっかけ

最初は、1980 年にタイ語の高校教師（国語教師）となったが、それから1, 2 年して、教頭から日本語を教えるように言われた⁽¹⁾。最初の10 年間は、タイ語も教えていたが、1997 年から日本語だけ教えるようになった。自分なりに、民間の日本語学校夜間コースで日本語を勉強したり、バンコク日本文化センターのセミナーに参加したり、日本の国際交流基金日本語国際センターの

日本語研修生としても2回、それぞれ2ヶ月程日本に滞在し、研修を受けてきた。

(2) 日本語教師になって良かったことと不満なこと

良かったことは、教えることで、生徒から学ぶことができた。自分の悩みも忘れることができ、生徒も助けることができた。外国語を教える方法を学ぶことができ、それを試すことができた。楽しい。視野が広がった。外国に行ける。外国の文化に触れることができる。外国人の友達ができ、いろいろな意見を交換することができた。もっと日本語を勉強して、生徒の知識や能力をもっと伸ばしてあげたい。しかし、時間を戻すことができるなら、日本語よりも英語を勉強したかもしれないとふと考えることがある。

(3) 勤務先の高校の日本語教育環境

教師Bの高校は、タイ有数の進学校である。学内の日本語学習者は増加している。週22コマ、日本語学習者数約300人（一クラス40人程度）を教えている。タイでは、2001年に新しい教育制度が始まり、会議、行事、試験などが増え、非常に忙しい。しかし、生徒が非常に優秀なので、教え甲斐がある。

(4) 人生の目標

謙虚さ。成功（失敗ばかりだから）。向上心（生徒にもっとうまく教えたい。優秀な生徒に勝ちたい、しかし、教師を超えていく生徒は誇らしい。）

(5) 自分の性格について

好きなところは、ほとんどないが、仕事熱心で、生徒の気持ちになれるところだろうか。嫌いなところは、せっかちで、教師らしく見えるところ。

4. 考察

教師Aと教師Bでは、いくつか対照的なところが見られた。デンドログラムの項目数、重要順、クラスター別、そして、半構造化面接の質問の観点から考察する。

・項目数

教師Aが13項目に対し、教師Bは5項目と半数以下である。しかし、教師Bの場合、5項目と少ないがPAC分析及び半構造化面接を通して、深く内在化がなされていることが感じられた。長年教師をやってきた教師としての意識の深さ、洞察力の鋭さ、そして日本語ネイティブのように日本語は流ちょうではないが、自分の考えを伝えようとする熱意と能力を感じ取ることができた。これは、項目数が中身を反映するものではないということを意味している。また、量的分析のみでは見えにくいものであると考えられる。

・重要順

教師Aは、①日本が好き ②日本語ができる ③日本の歴史について知っている、が重要順に挙げられていた。特徴としては、まず、日本が好きで、次ぎに日本語、日本文化への関心がある

ことが上位3位を占めていたことである。それに対し、教師Bは、①より良い教授のために工夫する、②常に新しく正確な情報を取り入れようとする、③学習者の心理がわかる、が挙げられていた。教師Bの専門性を高めるためにどうすべきかを考え、学習者の立場に立ってそれを行うという姿が見えてくる。教師Aの場合も、13項目のうち、4番目に、「資料を調べるのが好き」とある。また、重要順位として、②日本語ができる、③日本の歴史について知っている、を挙げたことは、日本語に関する専門知識に相当するとも考えられる。つまり、両教師とも、専門的知識が非常に重要だと考えていることがわかる。ただ、好対照なのは、教師Aがインターネットを通し情報収集をすると答えているのに対し、教師BはIT教育は、最良の方法とは限らず、人間である教師だからできるという考えを持っていることである。

・クラスター

教師Aの日本が好き、というクラスターは別のクラスターを形成しているので、知識とは別のものだと考えられる。また、教師Aのクラスター1（教師は生徒のためにある）が、重要順位4位の「資料を調べるのが好きだ」、及び重要順位5位の「生徒達が日本語が好きになるようになんでもやる」、そして、重要順位12位の「生徒に良い機会を与える：例えば奨学金」、及び重要順位13位の「生徒達の意見を訊く」、即ち、上位群と下位群で構成されていることが興味深い。

これは教師Aが、クラスター1の（教師は生徒のためにある）という前提の下、知識欲が旺盛で、日本語が好き、その上で、生徒達にできるだけの機会を与えたいという思いがあるとも考えられる。

・半構造化面接

教師Aは、日本に行く機会に恵まれ、日本が好きであることが日本語教師になった大きな要因となっている。教師Bは、日本語教師として研鑽を積みつつ、日本語教師である以前に長年の教師としての経験が、教師は生徒に対してどうあるべきか、自分は教師としてどうありたいかという強く深い思いがあることがわかる。教師Aは、生徒の学習意欲をどう高めようか苦心している。一方、教師Bは、優秀な生徒達に恵まれながらも、生徒達の抱える心理的な問題にどう対処しようかと考えている。教師Aは、生徒の貧困や教員の待遇の悪さについても言及している。また、日本語教材の不足も訴えている。

双方に共通しているのは、日本語教師であることに悩みを抱えながらも喜びを感じていることである。そして、専任日本語教員の少ない中で多くの日本語教授担当コマ数を持ち、さらに、日本語の授業以外の仕事もこなし、生徒のために奮闘している日本語教師の姿である。

5. まとめ

以上、二人のタイ人日本語教師を被験者として良き日本語教師について行ったPAC分析であるが、個人の性格、日本語教師としての経験年数、勤務先の高校の教育環境、タイの日本語教育事

情の影響など、さまざまな要因が背景にあると考えられる。その結果、以下のようにまとめられる。

1) 良き日本語教師像には個人差がある。

日本への好感度が高いことが前提になっている場合や、「教師」であることが前提になっている場合がある。

2) 良き日本語教師として学習者への配慮と専門知識は重要である。

3) 二人の教師の根底には、日本語教師としての喜びと学習者への深い思い、自身の日本語学習への強い意欲がある。

4) タイの日本語学習環境の特徴が見える。

生徒や教師の経済状況の悪さが学習意欲や教授意欲に影響をもたらしている。また、日本語教材や日本語教師の不足も推測できる。

6. おわりに

「教師の鏡」ということばを思い出した。一（いち）人間として、一（いち）日本語教師としての二人のタイ人日本語教師の良き日本語教師観と個の豊かさを少しでも客観的に示すことができたと考える。しかし、客観的に示そうとするが為に、重要な、「感じる」ということ、主観的なことを切り捨てようとする態度があるとしたら、それに、このPAC分析は疑問を投げかけているのではないかととも考察を進めながら思った。そういう意味でも、PAC分析を行ったことに意義を感じた。今後の課題として、良き日本語教師観に関し、量的分析と質的分析の相互補完的な関係についての研究、教師教育への援用が考えられる。タイにおける日本語教育への関心を深めることの一助となれればと考える。

注

(1) 1981年に後期中等教育課程に日本語が正式科目として採用されたことによると考えられる。

付記

本論文は、平成18年度～20年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究課題名「求められる日本語教員に日本語教員養成課程はどう応えるか」に関する総合的研究（研究代表：中川良雄、課題番号18320084）の一環として執筆したものである。

謝辞

最後に、本調査においてご協力頂いた国際交流基金バンコク日本文化センターの松原潤氏、PAC分析についてアドバイス頂いた山口県立大学の甲原定房氏に心から謝意を申し上げます。

参考文献

- 才田いずみ（2003）「日本語教育実習生の授業への態度：現職教師との比較」『日本語教育論集』19号、国立国語研究所、pp.1-15
- 内藤哲雄（2004）『PAC 分析実施法入門 [改訂版]』ナカニシヤ出版
- 縫部義憲・渡部倫子・佐藤礼子・小林明子・家根橋伸子・顔幸月（2006）「学習者が求める日本語教師の行動特性の概念」『日本語教員養成課程における実践能力の育成と教育実習の理念に関する調査研究』平成 16 年度～平成 17 年度科学研究費補助金基盤研究（B）課題番号：16320068 研究成果報告書 研究代表者；中川良雄（京都外国語大学外国語学部）、pp.94-105
- 横林宙世（2004）「日本語教員養成課程履修生の考える「良い日本語教師」のイメージ（1）」『西南女学院大学紀要』Vol.8、pp.107-115